

POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」
第42号 1999. 5. 30

発行
北海道ポーランド文化協会
〒060-0052
札幌市中央区南2東2
河合楽器製作所北海道支社
電話 011-231-8661
FAX 011-221-4936

ポーランド美術散歩(4)

國田祐作

尖鋭な美意識

ポーランドの古都クラクフ、その旧市内のマーケット広場に通ずるフロリアンスカ通りの一角にカフェ・ヤン・ミハリックがあります、ここは十九世紀末から続いているカフェで、当時の若い詩人、作家、画家たちが集まり芸術革新の意気もさかんに議論に明け暮れるタマリ場でした。このグループは「若きポーランド」と呼ばれました。カフェ内部は当時流行の幾何学的構成を基調としたユーゲント・シュティルのデザインで装飾されました。カフェの奥には小さなステージがあり、風刺をきかした寄席芸人の歌やダンスが喝采を浴びました。戦禍を免れて今でもそのままの姿で残り観光の名所になっています。壁には若い芸術家たちが酒代のかわりに残した漫画や即興的な絵が残っていて、ここでひとときを過ごししていると戦前の「良き時代」の雰囲気を感じられます。

「若きポーランド」の芸術革新の波は二十世紀のポーランドの幕を開きました。それは全ヨーロッパにおこった新しい芸術運動と同時的なものでした。シチェミンスキは革命後のロシアに渡り、モスクワ美術学校で構成主義のマレヴィッチに学び、故国に戻ってからはキュービズム絵画や文字記号によるポスターで美術界をリードしました。その斬新な表現は、いまでも新鮮な感動を与えます。

先年、ワルシャワの若い友人が一冊の画集を見せてくれました。ワイトキエヴィッチ(通称ワイトカツイ)の画集です。彼はワルシャワで生まれ、南部タトラ山中のザコパネで育ちました。両親とも芸術家という芸術的環境でワイトカツイは早くから劇作、絵画、写真に才能を発揮します。本格的な活動に乗り出したのは第一次世界大戦直後、ヨーロッパ全体を覆う崩壊感の中で、まやかしの人間

関係を暴力的に破壊するドラマを創造し、絵もまたデフォルメされた人間や怪物がひしめく異様な風景を連作しました。のちに「肖像画商会」を開店し、小説家、俳優などの似顔絵を製造して人気を呼びます。そのデフォルメされた人間の顔がかえってモデル自身気が付かない内面の姿を浮かび上がらせたのです。彼は一九三九年九月、ナチ侵攻に続きロシア軍のポーランド越境のニュースを聞き自ら死をえらび、不条理の舞台の幕を自分の手で閉じたのでした。



ワイトカツイ、コンポジション
(一九三二年)

トマシエフスキ ショパン
記念年ポスター



ポーランドの美術の中でポスターは格別の位置を占めています。私は一九九三年ワルシャワで開かれた「ポーランドのポスター百年展」を見てきました。とくに戦後のポスターは政治的制約をくぐって、苦渋とアイロニー、恐怖と開放感、詩と憂鬱に溢れ、その前衛性は世界を驚かせました。レニツァ、トマシエフスキなどのポスターは日本でもよく知られています。

いま市場の自由化で外国の大量の商品広告やアメリカ映画の看板が目抜き通りを占有しているのを見ると、反逆の抒情を湛えてきたポーランドのポスターがどこに行くのか不安を覚えます。(終)

ポーランド語講習会講師のご紹介

ポーランド語講習会が5月12日から新しい講師をお招きして開講しました。講師の先生をご紹介します。

高岡美保先生



札幌旭丘高校卒業後、'86年ポーランド国立ワルシャワ・ショパン音楽院入学。'91年同院卒業。卒業論文テーマは「I・F・ドブジンスキその生涯と作品」。'92年同院研究科修了。現在、札幌大谷高校芸術コース講師。

大学では音楽全般、また哲学や社会学などの授業をポーランド語で受けました。最初はチンプンカンプンでしたが、3年目位から、ポーランド人の学生と共に各課目の試験も受け、無事卒業することができました。(卒業のテーマに選んだドブジンスキは、ワルシャワ音楽院ではショパンの3歳年上の先輩で、近年、偶然そのピアノコンチェルトが発見され、その美しさもさることながら、その草稿を当人から見せてもらったショパンが、後に自分のコンチェルトの中でほとんどそっくりそのまま借用した箇所がいくつかあることから、当時大変話題になったものです。)ポーランド語は、その文法の複雑さから、最初はとっつきにくいと思われていますが、慣れてくると実に親しく、味わい深い言葉です。今回は、ハリーナ先生が、いらっしゃらない最初の講習ですが、マジェーナ先生という、力強

い後任の方を得ることができました。講習に通う方々に、言葉を通じて、ポーランドに親しんで頂ければと思っております。

MARZENA TYMCIO先生



ハリーナ先生と

1970年Kłodzko市に生まれる。現在、KATOWICE市に住んでいる。

1985年POZNAŃ (ポズナニ) にあるA.MICKIEWICZ大学の東洋学部日本学科に入学した。1995年に同じ大学の日本学科修士課程を修了した。同じ年の10月に来日し、1997年の3月に修士学位を取得した。現在、北海道大学大学院日本史学研究生として在学する。

札幌に来てから、ちょうど3年半になりましたが、ポーランド語の教師になるのは、初めての経験です。これから生徒になって来るまたはすでにポーランド語を勉強している皆様に早い上達と楽しい交流を心から祈っています。皆で、忘れられない思い出を作りましょうネ。

第三十五回例会

メラノヴィッチ先生の

三つのお土産

一月十六日、北海道ポーランド文化協会の例会は現在（八九年四月～九九年三月）宮城学院女子大学へ交換教授として滞在中のワルシャワ大学日本学科長ミコワイ・メラノヴィッチ氏をお迎えして行われた。

講演の中から、特に印象深かった事を三つ書いてみたい。

当日の講題は「ポーランドに於ける、日本文学の現状について」であったが、その内容は必然的に、氏の文学観を中心とした「ポーランドに於ける文学の特徴」というものに移っていった。

「文学とは何か」という事に関して氏は「自分にとって〈文学〉とは（こころ）である」と定義をされた。

（一）文学との象徴的出会いについて



次のエピソードを紹介された。

「私は小学校を卒業するとき、表彰として、一冊の本を校長から頂いた。その本の題名は『Amis』（こころ）といい、イタリヤ作家Giovanni de Amicisという人の著作であった。内容はイタリヤ人の独立の戦いの中に於ける、当時の若者たちの生き方の物語集であった。この一冊の本との出逢いが私の人間形成に、大変に大きな影響を及ぼした。」

次に、我々日本人にとって、大変難解なテーマである、ロマン主義という事について、「ロマン主義傾向はポーランドの特徴であり、ポーランド文学も同じである。」代表作家として、生誕二百年のアダム・ミツキヴィチ（一七九八～一八五五）と、歴史小説を書いたヘンリック・シエンキエヴィッチ（一八四六～一九一六）の二人を挙げられた。

又、氏は師範学校時代の体験として「宮沢賢治の『春と修羅』という詩集を通して、自分のこころの在り方を再認識させられた。」特に「春と修羅」のMental Sketch Modified（心象スケッチ）が深い感動を与えてくれた。さまざま



孤独の修羅というイメージは日本文学に現れた孤独の象徴だった。救済への道を農業の近代化や宗教に見た賢治のイメージのつらなりに深い共感と興味を覚えた。

又、何故、卒業論文（ワルシャワ大学、日本語学課学位論文）に賢治を取り上げたか、という聴衆からの質問に対しては、「むつかしくて（難解）、面白そうだったから。」という冗談めかした答えが返ってきた。

（二）翻訳家として
「翻訳は創造であり、一つの芸術である。」と力説された。

「ピアノは、毎日ピアノの訓練をする。翻訳も同じだ。毎日、三時間は必ず、机に向かう必要がある。これは訓練である。暮れも新年の三日も変わらない。訓練である限り、生きる道である限り、続けなければならない。」

（三）一流のものにしか興味を持たない
「自分が一流の人間と思えば、一流と感じる物にしか興味がない。」

時期を同じくして、札幌で開催されていた「全国劇作家大会99」に、ご案内して、劇作家の別役実、太田省吾、グッドマン（米・イリノイ大学教授）らと積極的に会い、精力的に札幌滞在を意義深いものとされた。

小生も二日間、行動を共にして、氏の行動力と膨大な日本大学に関する知識・歌舞伎・能・現代演劇に関するお話を聞かせていただき、この上ない至福の時間を過ごすことができました。氏の生き方が私の心に深い感銘と足跡を残して下さった事に感謝します。

雪清き

国に來たりて

二十歳の娘

メラノヴィッチ

〈文責 霜田千代鷹〉

第三十六回例会

ポーランド演劇の現状について

―ヤドヴィガ・ロドヴィッチ女史の講演―

三月二日(火)午後七時より、札幌市すみれホテルに於いて、駐日ポーランド共和国大使館参事官、ヤドヴィガ・ロドヴィッチ女史の講演の夕べと、終了後懇親会がもたれた。

当日は「ポーランド演劇の現状について」の講座の下、元ガルジェニエ劇団の女優としての経験を踏まえてのお話であった。

西洋の文化の基には「キリスト教」があり、日本の能、歌舞伎の基には「仏教」がある。

ヨセフ・パウロ二世とポーランド人の関係、特に連帯運動時にカソリック教会の果たした役割。ポーランド人の精神的な力となった。多様な歴史、民族性の差異の中から、いかなる普遍的なものが導かれてくるのか。

ポーランド人はどのようなものに感動するのか。

演劇の存在する社会的な意味。芸術は人生から消すことは出来ない。そして、話題は「宗教と芸術」に及び、人間とは何か、いかなるものなのか、社会に「生きる」という事に於ける、単なる「消費者」としての生き方と、社会に何が出来るのか。



るかという「生活者」としての生き方の問題。自分の為に演劇をやるという信念。

最後に今年の一月十四日に、イタリア、ポンテデラで亡くなったイエジ・グ

バザーのご案内

昨年は皆様にご協力をいただいたおかげで大きな効果をあげることができました。昨年の目標はクラコフの日本センター支援ということでしたが、今年度は少し範囲を拡げて広く文化活動を支援するという目的でバザーを開催したいと考えています。

昨年同様、品物の提供と当日のお手伝いのご協力をお願いいたします。

バザーの日程

日時 6月12日(土)

11時～15時30分

会場 市民会館2階 一号会議室

連絡先

小林 暁子

TEL-FAX 831-8570

斎田 道子

TEL-FAX 621-1738

準備のため事前に打ち合わせをしたいと思います。詳細が未定ですので、お手伝いを希望する方は、小林・斎田までお問合わせください。

ロトフスキーと彼の実験劇場の仕事について、直接、ワークショップに参加した経験に基づいて、ポーランド演劇、世界の演劇に及ぼした影響・役割についてのお話しをして、講演を終了した。

〈文責 霜田千代磨〉

「ポーレ」編集委員会

小笠原正明・斎田道子

佐々木保子・安田誠子

〔連絡先〕621-1738

(斎田)